

子どもの価値観・態度形成に影響を有する 家庭環境要因に関する一考察

—保護者の夫婦関係満足度、生活に着目して—

佐藤和順・柏まり*

A Study on the Influence of Home Environment Factors on the Formation of Children's Values and Attitudes : Focusing on Parental Marital Satisfaction Levels

This study focuses on child rearing at home in early childhood and how the child's consciousness of his or her parents' marital relationship influences later evaluation in adult life and child rearing. Based on survey results, we clarified that parents with a high level of marital satisfaction showed a tendency to have higher levels of happiness, harmony in work-life balance, and life satisfaction than those with lower levels of marital satisfaction. We also found that parents with high levels of marital satisfaction showed higher levels of satisfaction in child rearing and higher evaluation of their children's upbringing than those with lower levels of satisfaction. This suggests that improving the parents' living environment and enabling parents to increase their level of marital satisfaction could be a way to improve child-rearing quality.

I 問題の所在

子どもの生活の基本は家庭であり、家庭でどのように育つかは子どもの成長に大きな影響を与える。家庭は学校以上に、現代社会における人的資本の側面から社会を再生産する重要な機関であり、当該社会の生産力に応じた能力と資質を有した労働力を養成し、当該社会の生産関係を反映した社会的関係を形成する¹。われわれが通常家族の中に生まれ、両親やきょうだいをはじめとする他者との相互作用の中で生活・成長することを考えれば、各種の価値観・態度形成に関しても家族という要因が大きな意味を有していることは間違いのないことである。家族の中でも特に、保護者が子どもの価値観・態度形成等の育ちに最も関わっていることは自明のことであり、保護者の夫婦関係が子どもの育ちに影響を与えることは、容易に想像

できる。

夫婦関係及び結婚の満足度等については、これまで各種の研究の蓄積がみられるが心理学的なアプローチに依るものが主となっている。わが国における代表的な夫婦関係に関する調査としては、伊藤・池田・川浦ら（1999）の配偶者からの情緒的支持は夫の疎外感を低減するという知見²や、稲葉（1999）の妻のディストレスの低減にも直接作用していたという知見³等があるが、心理学的観点から夫婦間の効果・影響を中心とするものであった。夫婦関係が子どもの育ちにどのような影響を与えるのかという研究は、橘千恵・中村絵里子・中島夕美他（2008）、堀口美智子（2006）等があるが十分ではないと考えられる⁴。心理学的アプローチに加え各種観点から、両者の関係を明らかにする態度が必要である。

子育ての混迷が顕在化する今日、夫婦関係と保護者の生活状況、子育ての質がどのような関連性を有しているのかを明らかにすることが必要であ

* 岡山県立大学

ると考える。夫婦関係と子育ての質に関連する事項を検証することは、保護者の日常生活の課題の顕在化と改善にもつながる。両者の関連性が明らかになれば、保護者の夫婦関係を改善することが、子育ての質を保障する可能性を有することにもなる。

Ⅱ 研究の目的

本研究では、幼児期の家庭における子どもの育ちに関連すると想定される事項に着目し、保護者に特化して、夫婦関係に係る意識とそれが生活の状況及び子育ての評価にどのように影響するのかを調査する。

具体的な目的は次の通りである。第一に、保護者は自らの夫婦関係をどのように認識をしているのかを明らかにする。子どもが育つ家庭の核になるのは夫婦関係である。夫婦関係が良ければ、子どもの育ちにも良い影響があると推測される。夫婦関係の状態をはかる指標として夫婦関係満足度に着目する。

第二に、保護者の夫婦関係満足度と生活の状況及び子育ての評価の関係性を明らかにする。まずは夫婦関係満足度が、保護者の生活とどのような関係性を有しているのかを明らかにする。夫婦関係は家庭生活の核であるので、夫婦の関係性が保護者の幸福度、仕事と生活の調和度、生活に係る満足度等との関連性を有していると仮説構築している。次に子育ての評価に着目する。生活の状況と同様に、夫婦関係満足度の高い保護者の方が、低い保護者に比して自らの子育ての評価は高いと仮説構築している。子育ての質に関する評価はこれまでは育児ストレスを主とする研究⁷等を中心に行われてきたが、育児ストレス以外の観点からの成果が今後望まれる。子育ての評価に着目するのは、子育ての自己評価の高さが、直接子育ての質の向上に反映されるわけではないが、寄与する可能性は有していること、自らの子育てにどの程度満足感を有しているのかは、自らの子育てを振り返る機会となる等からの理由である。

上述の仮説に妥当性があるのであれば、保護者の夫婦関係満足度を高めるようにすることも、生活の満足度を高め、そのことが子育ての評価を高めることになる。

本研究は、以上の目的を達成することにより、子どもの成長に影響を与える保護者の生活に係る現状の課題を顕在化させ、今後の子どもとのかかわり方に示唆を与え得るものである。また、保護者の生活環境を向上させ、子育ての質の保障を目指すものである。

Ⅲ 研究の方法

本研究の保護者の夫婦関係満足度が生活及び子育ての評価に与える影響に関する調査の概要については、次のとおりである。

1. 調査項目

(1) 夫婦関係満足度

夫婦関係の状態を把握するために、諸井(1996)の夫婦関係満足度尺度を用いる⁶。本尺度は、ノートン(1983)⁷が夫婦の関係全体の良さを反映させる項目に限定して作成したQMI (Quality Marriage Index)を翻訳し、わが国の幼稚園・保育所の保護者を対象に妥当性等を検証したものである。夫婦関係満足度、結婚満足度については複数の尺度があるが、本尺度がわが国において幼稚園・保育所の保護者を対象にして妥当性・信頼性等を検証していることに鑑み、幼稚園の保護者が調査対象である本研究の趣旨等に添うものであることから採用した。本夫婦関係満足度尺度は、夫婦関係の満足度について、本人が回答する尺度である。

(2) 生活状況について

保護者は自らの生活状況についてどのような認識を有しているのかを明らかにするために、幸福度、仕事と生活の調和度、「生活全般」、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の満足度を明らかにする⁸。仕事と生活の調和度を問うことは、

子育て期の保護者のワーク・ライフ・バランスの現状を顕在化することになる。

(3) 子育ての評価について

保護者は自らの子育てについてどのような認識を有しているのかを明らかにするために、子育ての満足度、夫の子育てについての関わり及び子育てに関する不安や悩みについての質問を行う。

(4) 保護者の夫婦関係満足度と生活状況、子育ての評価の関係性について

保護者の夫婦関係満足度と生活状況及び子育ての評価の関係性を見るために、各種の相関分析を行う。

2. 調査の方法及び回収結果

A県内の同一学校法人立の3園、家庭数549の保護者1,090人の保護者を対象に、園からの配布にて2014年7月に質問紙調査を実施。有効回答数は817であり、回収率は75.1%であった。

3. 回答者の属性

回答者の性別、年齢、就労状況等の属性は表1～3の通りである。幼稚園の保護者を対象にした調査であったために、女性の過半数が専業主婦であった。男性については、正社員・自営についているものが、97.4%と高い割合を示した。

IV 結果と考察

1. 夫婦関係満足度

本研究の第一の目的である保護者の夫婦間関係の状態を把握するために夫婦関係満足度をはかった。具体的には、「私たちは、申し分のない結婚生活を送っている」「私と妻の関係は、非常に安定している」「私たちの夫婦関係は、強固である」「妻との関係によって、私は幸福である」「私は、まるで自分が妻と同じチームの一員のようにであると、本当に感じている」「私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う」とい

表1：回答者の性別

性別	n	%
男性	385	47.1
女性	432	52.9
全体	817	100.0

表2：回答者の年齢

性別 年齢	男性		女性	
	n	%	n	%
20-24歳	0	0.0	6	1.4
25-29歳	19	4.9	36	8.3
30-34歳	104	27.0	148	34.3
35-39歳	126	32.7	161	37.2
40-44歳	97	25.2	72	16.7
45-49歳	33	8.6	6	1.4
50歳代	6	1.6	3	0.7
全 体	385	100.0	432	100.0

表3：回答者の就労状況

性別 就労状況	男性		女性	
	n	%	n	%
正社員・自営	375	97.4	73	16.9
アルバイト等	4	1.0	109	25.2
専業主婦(夫)	0	0.0	240	55.6
その他	6	1.6	10	2.3
全 体	385	100.0	432	100.0

う設問に対して「かなりあてはまる」「どちらか」というとあてはまる」「どちらかというとはまらない」「かなりあてはまらない」から選択させ、それぞれに4点、3点、2点、1点を付した。単純合計得点を夫婦関係満足度得点とした。合計得点別の度数分布は図1に示すとおりである。18点が最も多く、次に24点が続いた。平均点も、17.46点であり、高い傾向を示した。調査対象の保護者

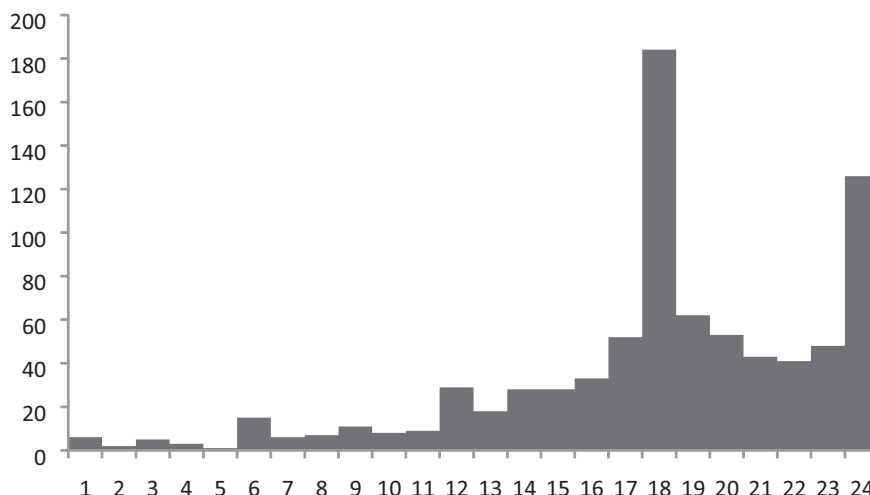


図1：夫婦関係満足度得点の度数分布

表4：夫婦関係満足度得点の分類表

カテゴリ	n	%
低満足度	261	31.9
中満足度	245	30.0
高満足度	311	38.1

は、夫婦関係満足度については全般的に満足しているという傾向を示した。幼稚園に子どもを通わせる保護者の多くは、男性は一定の職に就き、また男性・女性ともに結婚をし、子どもももうけており、このことが夫婦関係満足度の高さの要因であると考えられる。

得られた夫婦関係満足度得点合計によって「低満足度」「中満足度」「高満足度」の3つのカテゴリに分類を行った。「低満足度」は夫婦関係満足得点が17点以下(31.9%)で夫婦間の満足度が低い傾向にある群である。「高満足度」は20点以上(38.1%)であり、逆に夫婦間の満足度が高い傾向にある群である。「中満足度」は、「低満足度」「高満足度」の中間に位置する群であり得点は18から19点(30.0%)であった。その結果を示したものが表4である。

2. 生活状況について

保護者は自らの生活状況についてどのような認識を有しているのかを明らかにするために、生活の状況の指標として幸福度、仕事と生活の調和、各生活の満足度等について質問を行った。

(1) 幸福度について

保護者が自らの幸福度についてどのように認識しているのかを明らかにするために質問を行った。具体的には、「現在、あなたはどの程度幸せですか。『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点とすると、何点くらいになると思いますか。」という質問に対して得点を付す形で回答と求めた。10～7点を「幸せ」、6～4点を「ふつう」、3～0点を「不幸」に分類した。夫婦関係満足度別の結果は図2に示すとおりである。

「高満足度」「中満足度」「低満足度」とともに「幸せ」が高い割合を占めたが、夫婦関係満足度が高いほど、幸福度がより高い結果となった。夫婦関係満足度と幸福度との関連をみるために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった($\chi^2=112.96$, $df=4$, $p<.01$)。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度が高い傾向にあるものが、幸福度も高い傾向にあることが把握できた。このこ

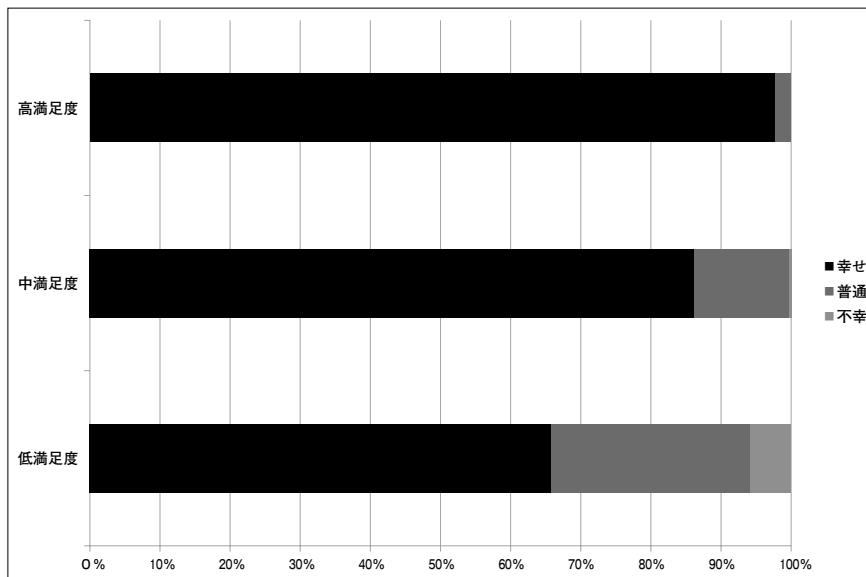


図2：夫婦関係満足度別幸福度

とは常識的な結果を示すものであるが、一般的に幸福度に影響を与えるものとして家計の状況（所得・消費）、健康状況、家族関係等があげられる⁹が、家族関係の中でも特に夫婦関係満足度が幸福度と関連性を有することが明らかとなった。

(2) 仕事と生活の調和度について

保護者の現在の仕事と生活の調和度に関する質問を行った。具体的には、「あなたの現在の生活は仕事と生活の調和がとれていると思いますか」という設問に対して「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」「わからない」の選択肢から選択させた。夫婦関係満足度別の結果を示したものが、図3である。

「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順に、調和が取れている（「とてもそう思う」＋「ややそう思う」）と考えている傾向があり、反対に「低満足度」「中満足度」「高満足度」の順に調和が取れていない（「あまりそう思わない」＋「まったくそう思わない」）と考える傾向があることが明らかになった。夫婦関係満足度と仕事の生活の調

和度との関連を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった（ $\chi^2=84.50$ 、 $df=10$ 、 $p<.01$ ）。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度が高い傾向にあるものが、仕事と生活の調和度も高い傾向にあることが把握できた。

(3) 生活の満足度について

保護者の具体的な生活の満足度をはかるために、各種生活に係る満足度について質問を行った。具体的には「『生活全般』『仕事』『家庭生活』『地域・個人の生活』それぞれの項目について、あなたはどの程度満足していますか」という質問に対して、「とても満足している」「やや満足している」「どちらでもない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」「わからない」の選択肢から選択させた。

「生活全般」における夫婦関係満足度別の満足度の結果は、図4に示すとおりである。全般的に満足している傾向（「とても満足している」＋「やや満足している」、以下同じ）があるが、「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順に満足している傾向が明らかとなった。夫婦関係満足度と

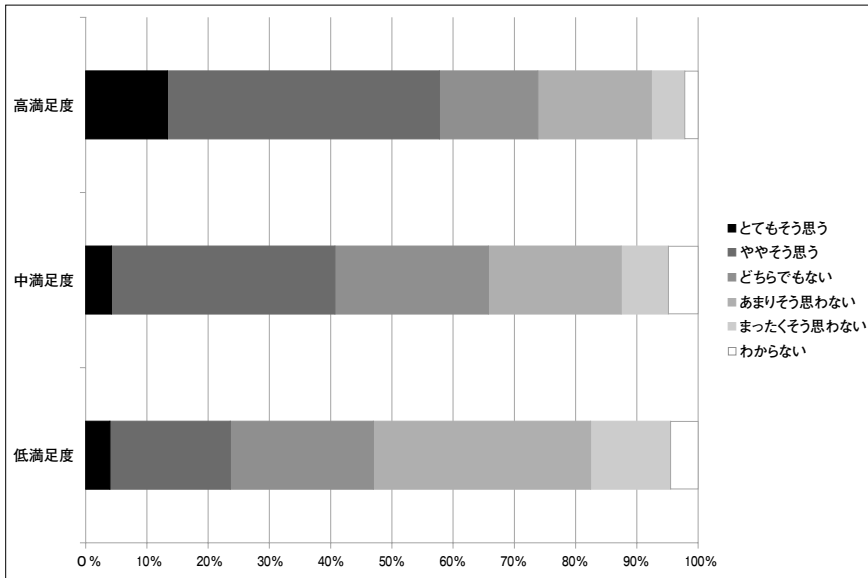


図3：夫婦関係満足度別仕事と生活の調和度

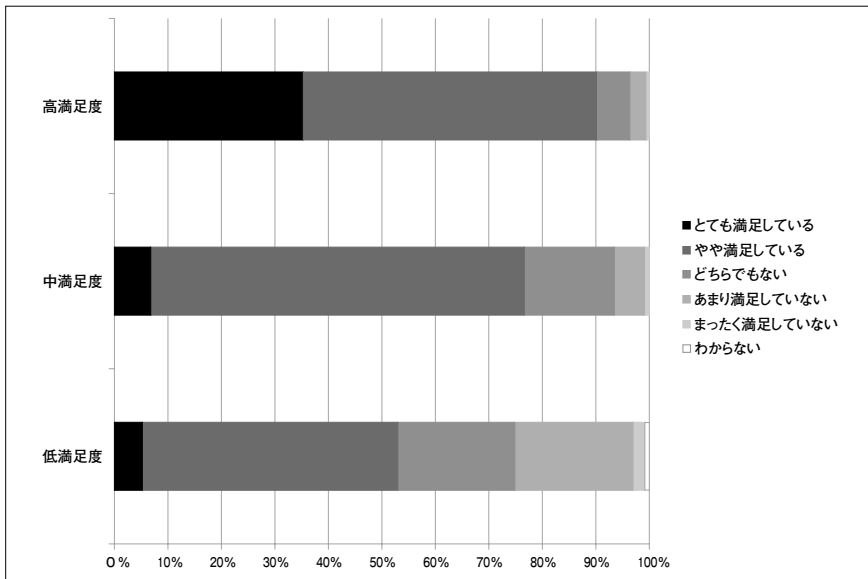


図4：夫婦関係満足度別「生活全般」の満足度

「生活全般」の関連性を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった ($\chi^2=198.88$, $df=10$, $p<.01$)。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度が高い傾向にあるものが「生活全般」に係る満足度が高い傾向にあることが把握できた。

生活を構成する「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」各要素別の満足度に関しては次のとおりである。「仕事」における夫婦関係満足度別の満足度は、図5に示すとおりである。「生活全般」と比すると満足している傾向は低いが、「高満足

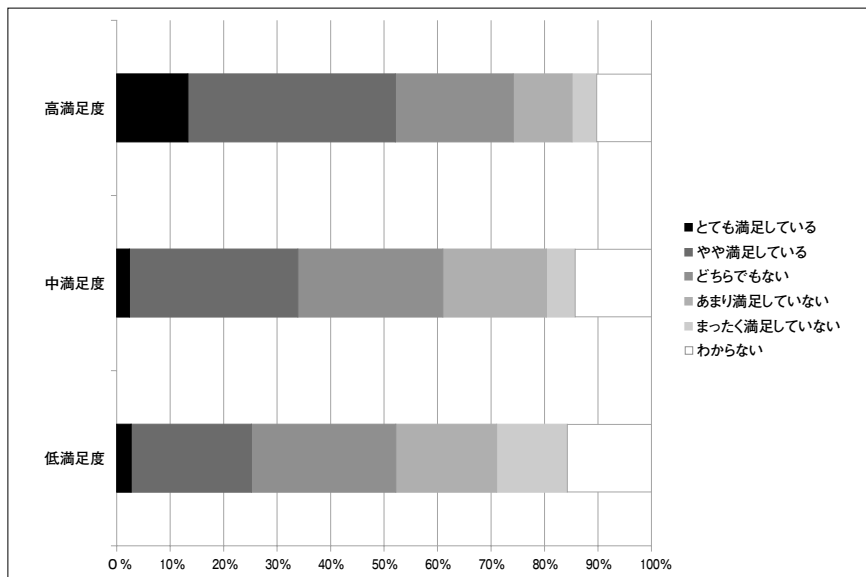


図5：夫婦関係満足度別「仕事」の満足度

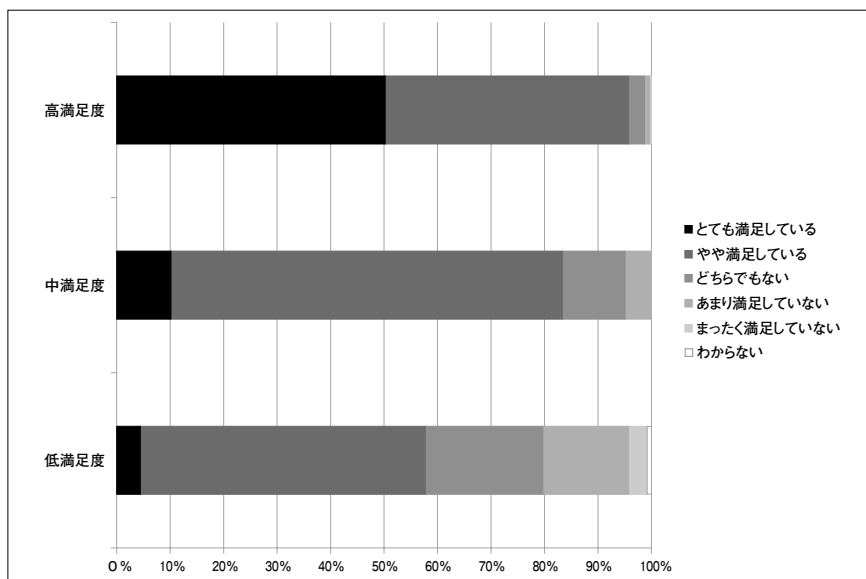


図6：夫婦関係満足度別「家庭生活」の満足度

度」「中満足度」「低満足度」の順であることには変わりはない。「どちらでもない」「わからない」が高い傾向を示したが、調査対象が幼稚園の保護者であり、母親には専業主婦が一定数いることからこのような傾向になったのではないかと推

測される。夫婦関係満足度と「仕事」の満足度の関連性を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった ($\chi^2=71.90, df=10, p<.01$)。

「家庭生活」における夫婦関係満足度別の満足度は、図6に示すとおりである。「生活全般」と

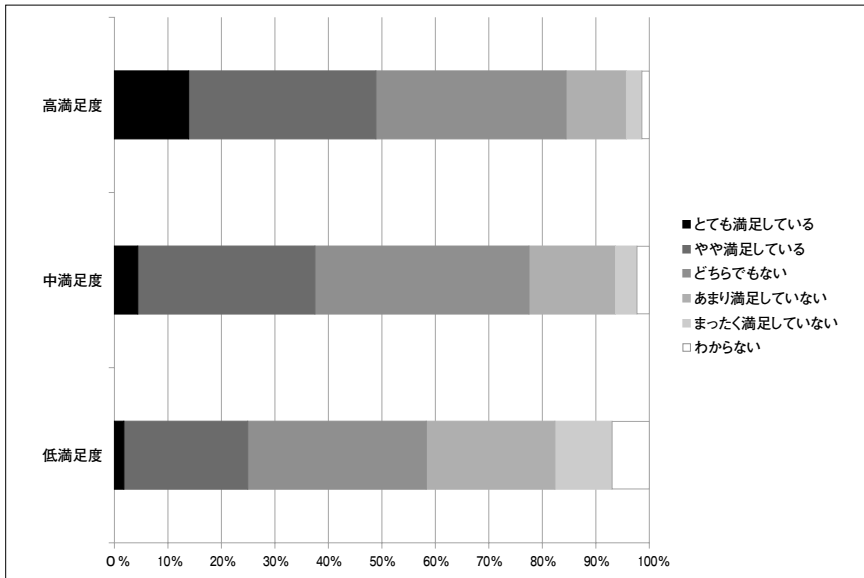


図7：夫婦関係満足度別「地域・個人の生活」の満足度

同様全般に満足している傾向が高く、「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順に高い満足度を示した。夫婦関係満足度と「家庭生活」の満足度の関連性を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった ($\chi^2=282.92$, $df=10$, $p<.01$)。

「地域・個人の生活」における夫婦関係満足度別の満足度は、図7に示すとおりである。すべての満足度において「どちらでもない」が高い割合を示した。「仕事」と同様に「生活全般」「家庭生活」と比すると満足している傾向は低いが、「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順であることには変わりはない。夫婦関係満足度と「地域・個人の生活」の関連性を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった ($\chi^2=86.94$, $df=10$, $p<.01$)。

残差分析を行った結果、夫婦関係満足度が高い傾向にあるものが、「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の満足度も高い傾向にあることが把握できた。夫婦関係満足度と「生活全般」「家庭生活」「仕事」「地域・個人の生活」の満足度には関連があることが明らかとなった。「生活全般」「家庭生活」の満足度は全般的に高く、同じよう

な傾向を示したことから生活の満足度を考えるとき、「家庭生活」を主に想定していると推測される。一方、「仕事」をすることは生活に必要なものであるがあくまで生活の糧であるために、満足度は低い傾向を示すと考えられる。「地域・個人の生活」での満足度が「どちらでもない」が高い割合を示したことは、ボランティア活動や社会参加活動等の地域活動が行われていない、もしくは「地域・個人の生活」があまり意識されていないことの現れではないかと推測される。満足度の高低等の相違はあるが、夫婦関係満足度が「生活全般」「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の満足度と関連を有していることが明らかとなった。

3. 子育ての評価について

(1) 子育ての満足度について

夫婦関係満足度と子育ての評価の関係性を明らかにするために、自らの子育ての満足度に関する質問を行った。

具体的には「あなたは現在の自分の子育てにどの程度満足していますか」という問に対して「とても満足している」「やや満足している」「どちら

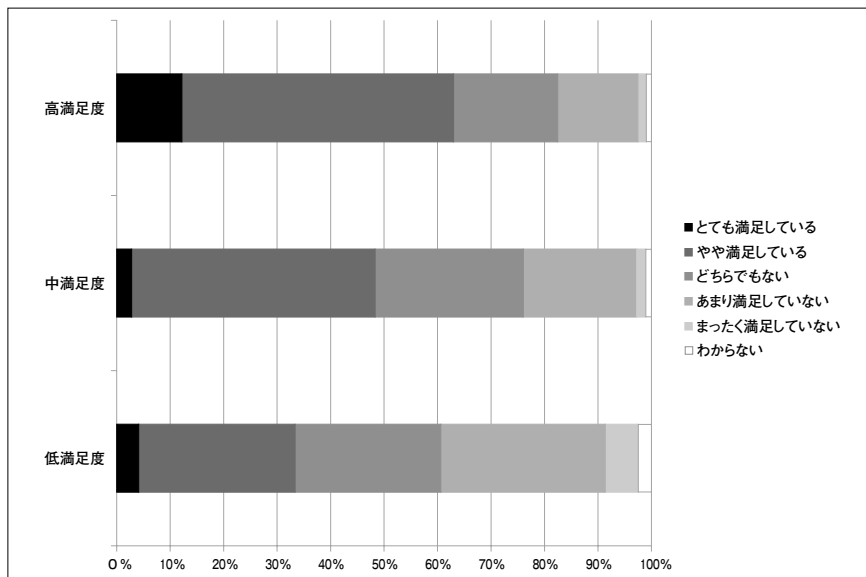


図8：夫婦関係満足度別子育ての満足度

でもない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」「わからない」という選択肢から選択させた。夫婦関係満足度別の結果は、図8に示すとおりである。

「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順に、満足している（「とても満足している」＋「やや満足している」）と考えている傾向があり、反対に「低満足度」「中満足度」「高満足度」の順に満足していない（「あまり満足していない」＋「まったく満足していない」）と考える傾向があることが明らかになった。夫婦関係満足度と子育ての満足度の関連性を見るために見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった（ $\chi^2=72.05$, $df=10$, $p<.01$ ）。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度の高い傾向にあるものが、子育ての満足度も高い傾向があることが把握できた。

(2) 父親の子育てへの関わりについて

父親の子育てへの関わりが夫婦関係満足度にも影響を及ぼすのではないかと考えられるので、父親の子育てに関する質問を行った。具体的には、「あなたは、あなた自身（母親には、配偶者）の

子育てへの関わりはどの程度だと思いますか」という質問に対して「十分である」「ある程度は十分である」「やや不十分である」「不十分である」「わからない」という選択肢から選択させた。夫婦関係満足度別の父親の子育てへの関わりの結果は図9に示したとおりである。

「高満足度」「中満足度」「低満足度」の順に、関わりは十分である（「十分である」＋「ある程度は十分である」）と考えている傾向があり、反対に「低満足度」「中満足度」「高満足度」の順に十分ではない（「不十分である」＋「やや不十分である」）と考えている傾向が明らかになった。夫婦関係満足度と父親の子育てへの関わりの関連性を見るために見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、有意であった（ $\chi^2=91.55$, $df=8$, $p<.01$ ）。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度の高い傾向にあるものが、父親の子育てへの関わりが十分であると考える傾向があることが把握できた。

(3) 子育てに関する不安や悩みについて

子育てに関する不安や悩みの状態を明らかにするために子育てに係る不安や悩みに関する質問を

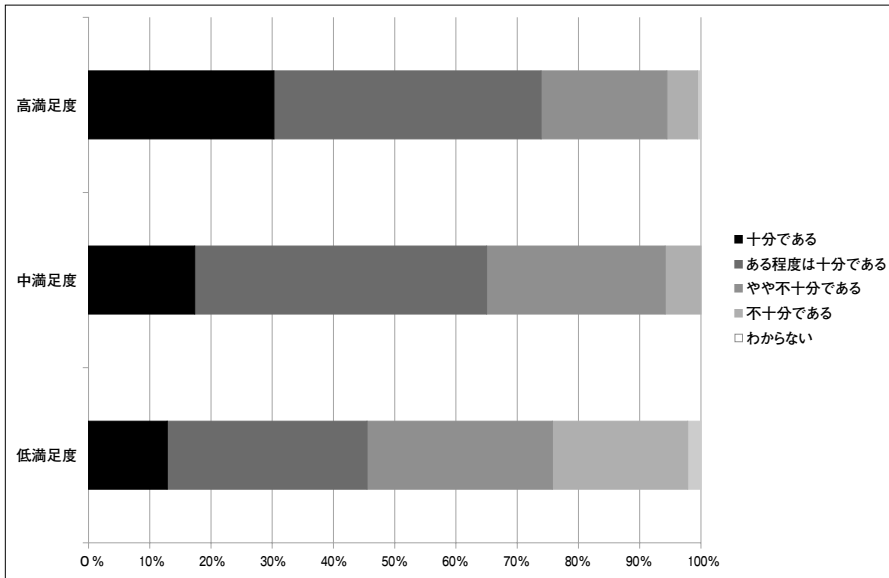


図9：夫婦関係満足度別父親の育児への関わり

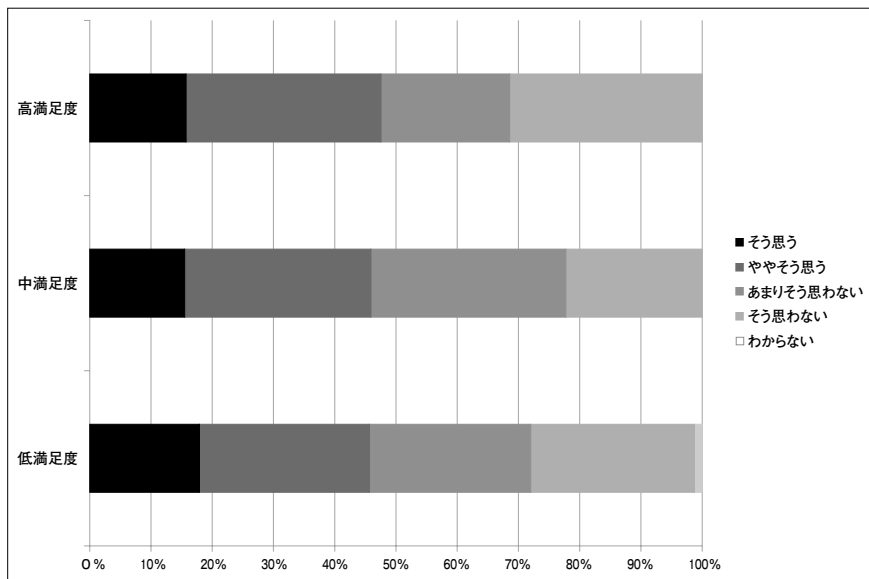


図10：夫婦関係満足度別「子どもとの時間が十分にとれない」回答

行った。具体的には「子育ての不安や悩みについてお聞きします。以下の項目において、該当する選択肢を選択ください。」という設問で「子どもとの時間が十分にとれない」「子どもとの接し方に自信が持てない」「子育てで配偶者との意見が

合わない」「仕事や自分のことが十分にできない」「子育てについて周りの目が気になる」という項目について「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「わからない」の選択肢から選択させた。

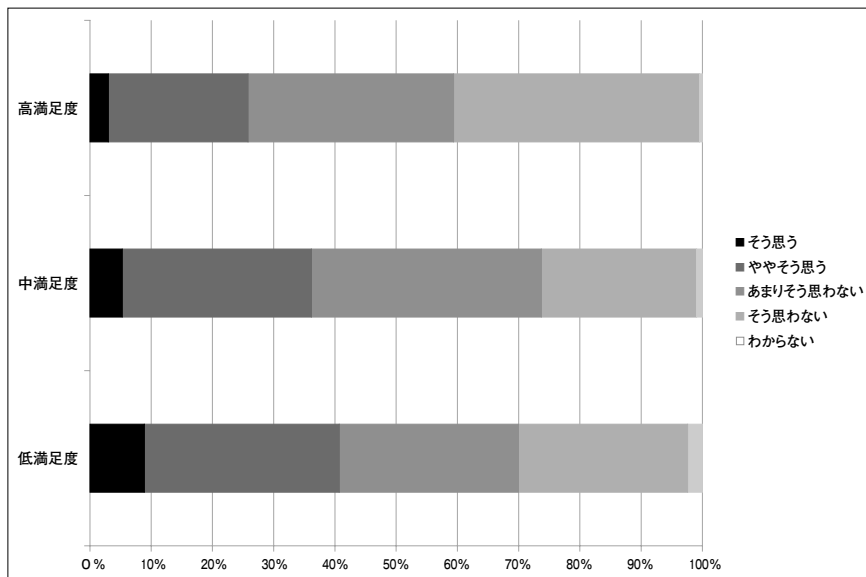


図11：夫婦関係満足度別「子どもとの接し方に自信が持てない」回答

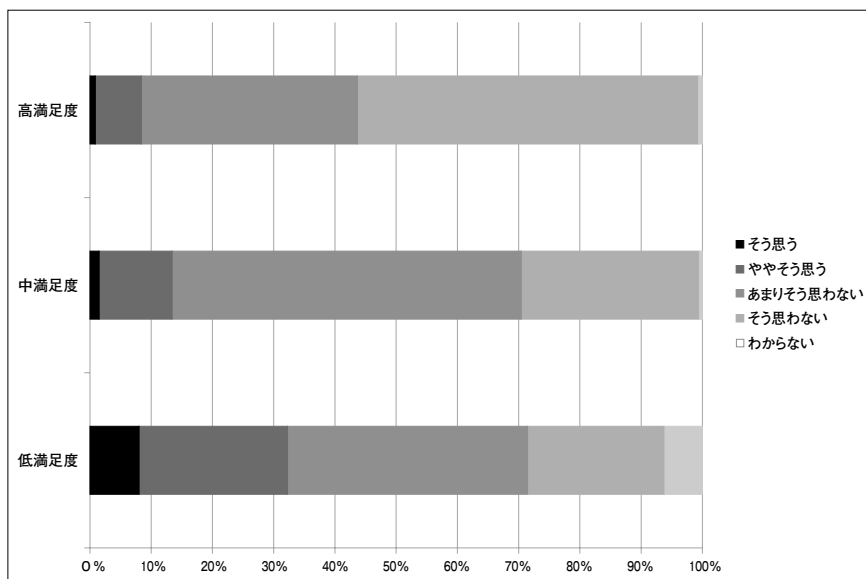


図12：夫婦関係満足度別「子育てで配偶者との意見が合わない」回答

それぞれの項目についての夫婦関係満足度別の結果は図10～14に示すとおりである。「子どもとの接し方に自信が持てない」「子育てで配偶者との意見が合わない」「仕事や自分のことが十分にできない」については、「低満足度」「中満足度」

「高満足度」の順に不安や悩みがある（「そう思う」＋「ややそう思う」）と考える傾向があることが明らかになった。不安や悩みは夫婦関係満足度及び子育てにとってマイナス要因であるためにこのような結果になったと考えられる。「子どもとの

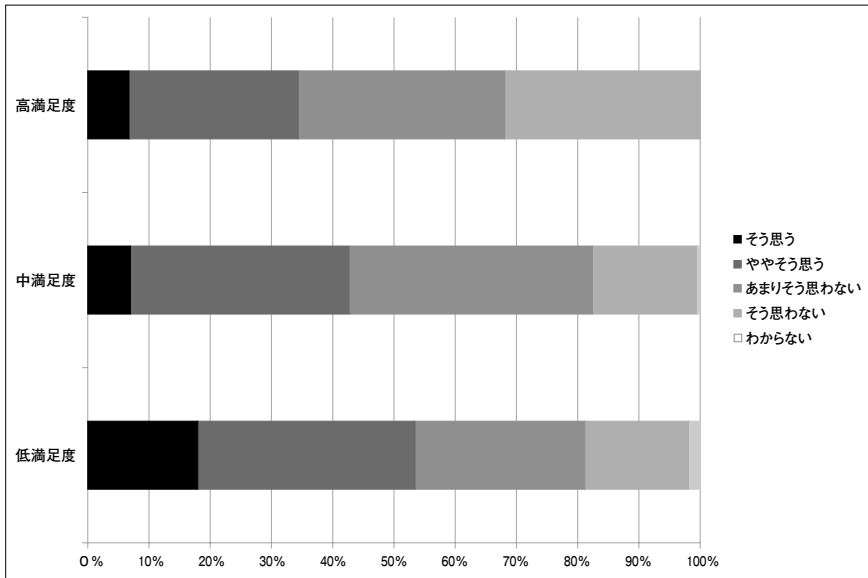


図13：夫婦関係満足度別「仕事や自分のことが十分にできない」回答

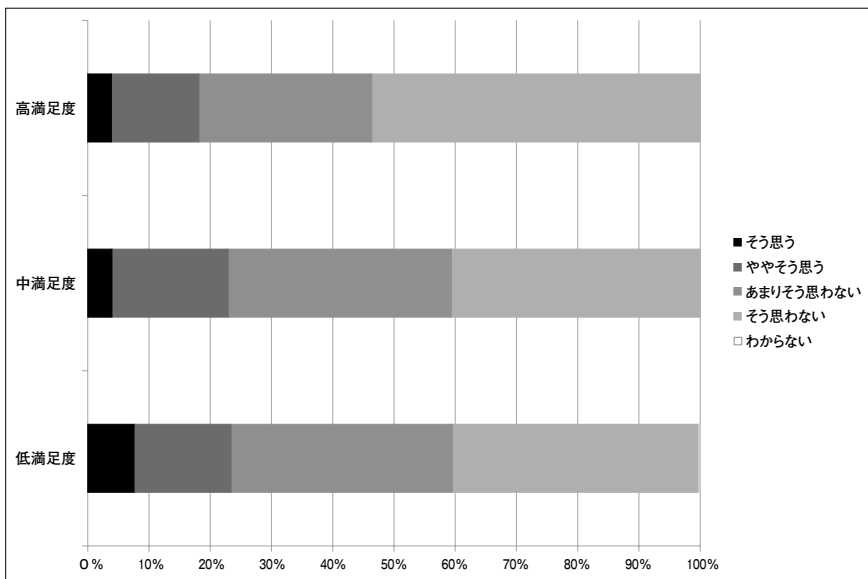


図14：夫婦関係満足度別「子育てについて周りの目が気になる」回答

時間が十分にとれない」「子育てについて周りの目が気になる」については、夫婦関係満足度別に段階的な結果とはなっていない。「子どもとの時間が十分にとれない」については、すべての満足度において半数近くが十分な時間が取れていない

と考えおり、共通の悩みであることが明らかとなった。「子育てについて周りの目が気になる」については、「そう思わない」が最も高い割合を占めており保護者として育児に関わることに違和感等を有していないことの現れだと考えられる。

夫婦関係満足度とそれぞれの項目の関連性を見るために χ^2 乗検定を行った。結果は、全て有意であった（「子どもとの時間が十分にとれない」 $\chi^2=18.41$, $df=8$, $p<.05$ 、「子どもとの接し方に自信が持てない」 $\chi^2=33.10$, $df=8$, $p<.01$ 、「子育てで配偶者との意見が合わない」 $\chi^2=141.79$, $df=8$, $p<.05$ 、「仕事や自分のことが十分にできない」 $\chi^2=56.95$, $df=8$, $p<.01$ 、「子育てについて周りの目が気になる」 $\chi^2=20.17$, $df=8$, $p<.01$ ）。残差分析を行った結果、夫婦関係満足度が高い傾向にあるものが、子育てに関する不安や悩みは低い傾向であることが把握できた。

4. 保護者の夫婦関係満足度と生活状況、子育ての評価の関係性について

夫婦関係満足度と生活及び子育ての評価の関連を見るために、保護者の夫婦関係満足度と生活及び子育ての満足度について相関分析を行った。そ

の結果は、表5に示すとおりである。夫婦関係満足度と幸福度 ($r=.541$)、「生活全般の満足度」($r=.439$)及び「家庭生活の満足度」($r=.522$)の間には正の相関関係が認められた。夫婦関係満足度の高いものが、幸福である、生活の中でも「家庭生活」において満足度が高い傾向にあると推測される。

夫婦関係満足度と「仕事と生活の調和度」($r=.285$)「仕事への満足度」($r=.208$)「地域・個人の生活への満足度」($r=.309$)「子育ての満足度」($r=.270$)「父親の子育てへの関わり」($r=.360$)の間に弱い正の相関関係が認められ、「子育てで配偶者との意見が合わない」($r=-.261$)とは弱い負の相関関係が認められた。夫婦関係満足度の高いものが、前述の幸福度、「生活全般の満足度」、「家庭生活の満足度」に加え、「仕事と生活の調和度」「仕事への満足度」「地域・個人の生活への満足度」「子育ての満足度」「父親の子育てへの関わり

表5：夫婦関係満足度と生活及び子育ての評価の相関関係

項 目		相関係数 (r)
幸福度		0.541
仕事と生活の調和度		0.285
生活全般への満足度		0.439
仕事への満足度		0.208
家庭生活への満足度		0.522
地域・個人の生活への満足度		0.309
子育ての満足度		0.270
父親の子育てへの関わり		0.360
子育てに関する不安や悩み	子どもとの時間が十分にとれない	-0.009
	子どもの接し方に自信が持てない	-0.126
	子育てで配偶者との意見が合わない	-0.261
	仕事や自分のことが十分にできない	-0.134
	子育てについて周りの目が気になる	-0.109

り」が高い傾向にあると推測される。

反対に、「子育てで配偶者との意見が合わない」という傾向は低いと考えられる。このことは夫婦関係満足度が高いものは夫婦間のコミュニケーションが十分に取れており、意見の調整が可能になっていることの現れだと推測される。

以上のことから、夫婦関係満足度は保護者の生活及び子育ての評価と関連があると考えられ、夫婦関係の満足度の高さが生活や子育ての満足度の高さに影響を有するのである。

V 総合考察

本研究から得られる知見は、次の通りである。

第一に、今回調査対象の保護者の夫婦関係満足度は全般的に高い傾向を示した。男性は一定の職に就き、また男性・女性とともに結婚をし、子どもももうけており、このことが夫婦関係満足度の高くなった要因であると考えられる。本研究の調査対象が幼稚園に子どもを通わせる保護者であったことが影響していると考えられる。夫婦関係満足度と生活の満足度との関係性については、夫婦関係満足度の高い保護者が低い保護者に比して、幸福度、仕事と生活の調和度、生活の満足度が高い傾向を示すことが明らかとなった。良い夫婦関係を構築することが、良い生活の構築に繋がる可能性を有していることが確認できた。特に近年重要視されているワーク・ライフ・バランスの観点から、ワーク・ライフ・バランスの調和度を高めるためには、夫婦関係の満足度を高める配慮も必要であることも明らかとなった。

第二に、保護者の夫婦関係満足度と子育ての評価の関係性については、夫婦関係満足度の高い保護者が低い保護者に比して、子育ての評価が高い傾向を把握した。夫婦関係満足度が高い保護者の方が、そうでない保護者に比して自己評価ではあるが、満足度の高い子育てを展開していると考えられる。父親の育児に係る姿勢及び夫婦間のコミュニケーションも、保護者の夫婦関係満足度を高くする要因であると推測される。子育ての自己

評価の高さが、直接子育ての質の向上に反映されるわけではないが、寄与する可能性は有している。子育てのスキルや子育て環境を整えると同様に、保護者の生活環境を整え、保護者が夫婦関係満足度を高められるようにすることも子育ての質を高める方法になり得る可能性を示唆している。

上述のような結論は常識的であると考えられる。しかし今日の各種施策策定を検討する段階で実証結果を重視するEBPM (Evidence Based Policy Making) サイクルモデル構築の観点からは有用な結果であると考えられる。健全な夫婦関係、家庭環境を構築することが、子どもの健全な育ちに寄与するという常識的な考えを実証したことに意味があるのである。今後、子ども・子育ての施策を検討する段階で、健全な夫婦関係、家庭環境を構築すること、父親の育児参画及び夫婦間コミュニケーションをとることに配慮することが重要である。

保護者の夫婦関係満足度について認識・現状を明らかにしたこと、子育ての評価との関係を示したことで、本研究は一定の成果をあげることができたと考えられる。同時に、新たな別の課題も顕在化してきた。質問紙調査の精査を行う必要性である。具体的には、残差分析に加え、各要素・要因(就労状況・男女差・子どもと接する時間等)とのさらなる比較検討が必要である。調査対象を拡大する必要もあると考えられる。本研究の結論は、調査対象が幼稚園に子どもを通わせる保護者であることに起因すると推測される。幼稚園就学前、保育所に子どもを通わせる保護者、就学後と子育ての評価は、変容すると想定されるので、経年調査を含む、調査対象の拡大も必要である。また、夫婦関係満足度は、性別役割観が関係しているのではないかと推測される。性別役割観は「男は仕事、女は家庭」「男性は主要な業務、女性は補助的業務」に代表される公的及び私的領域における男女の役割分担であり、ライフスタイルに現れる¹⁰。特に再生産論の観点から、子どもの性別役割観形成に影響を与える保護者の性別役割観を検証することには意味があると考えられる。

また本研究は、夫婦関係満足度の調和度、子育ての満足度等、研究対象者の主観に拠っている研究である。主観的な評価に加え、客観的な評価基準を作成し、両者の関連性を調査することも今後求められる。

本研究を基盤に、保護者の夫婦関係満足度と客観的な生活及び子育ての質の評価の関係を明らかにするような研究を継続することが、夫婦関係満足度実現に少しでも寄与し、子育ての質を保障することになる。

【註】

- 1 田中亨胤・佐藤和順、「幼児のしつけ形成過程にみるジェンダー再生産の装置—保護者を対象にした調査をもとに—」、『兵庫教育大学研究紀要』、22巻、2002年、pp.1-9.
- 2 伊藤裕子・池田政子・川浦康至、「既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響」、『心理学研究』、70巻、1999年、pp.17-23.
- 3 稲葉昭英、「有配偶女性のディストレスの構造」、石原邦雄（編）『妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク』、東京都立大学都市研究所、1999年、pp.87-119.
- 4 代表的な研究としては橘千恵・中村絵里子・中島夕美他、「夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着、夫婦関係満足度との関連：妻との比較」、『母性衛生』、49巻第1号、2008年、pp.65-73.、堀口美智子、「乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度」、『家族社会学研究』、17巻第2号、2006年、pp.68-78.、加藤邦子・石井クンツ昌子・土谷みち子、「父親の育児かわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコーホート比較から」、『発達心理学研究』、13巻1号、2002年、pp.30-41.、数井みゆき・無藤隆・園田菜摘、「子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家庭について」、『発達心理学研究』、7巻1号、1996年、pp.31-40.、大島聖美、「夫婦関係の子どもの養育」、3巻、『広島国際大学心理学部紀要』、2016年、pp.79-90.等がある。
- 5 代表的な研究としては桑名佳代子・細川徹、「1歳6か月児をもつ親の育児ストレス（1）—母親の育児ストレス関連要因—」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』、56巻第1号、2007年、pp.247-263.、手島聖子・原口雅浩、「乳幼児健診審査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発」、『福岡県立大学看護学部紀要』第1巻第1号、2003年、pp.15-27.、橘千恵・中村絵里子・中島夕美・石田貞代・萩原結花、「夫の育児行動の特徴と子どもへの愛着、夫婦関係満足度との関連：妻との比較」、『母性衛生』、49巻1号、2008年、pp.65-73.等がある。
- 6 諸井克英、「家庭内労働の分担における衡平性の知覚」、『家族心理学研究』、第10巻第1号、1996年、pp.15-30.
- 7 Norton,R., Measuring marital quality : A Critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 1983, pp.141-151.
- 8 質問紙の内容については、2008年8月実施の内閣府仕事と生活の調和推進室による「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する意識調査」を参考にした。
- 9 幸福度を高める要因の分析等については、内閣府（2011）「国民生活選好度調査（平成23年度）入手先（http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h23/23senkou_03.pdf）（参照2014-11-01）等を参考にした。
- 10 内閣府『第3次男女共同参画基本計画策定に向けて（中間整理）』2010年、p.6.